

タイモンの博愛と呪詛

金城盛紀

The virtue of prosperity is temperance,
the virtue of adversity is fortitude.

Francis Bacon

1

『アセズのタイモン』 *Timon of Athens* の筋は単純である。アセズ（アテネ）の富豪タイモンは、知友を大事にし、鷹揚で気前がよい。豪華な宴会を開いて客を歓待し、また惜しみなく金品を与える。寄り集まる人々の感謝と賞賛の言葉に有頂天になるのであるが、散財の結果、ついに破産する。タイモンの莫大な財宝を食い潰した友人たちは、窮地に陥った恩人を助けるどころか、負債の返済を迫る。心が広く、人間愛の権化の如くであったかつての長者は、忘恩貪欲の仕打ちに失望落胆して、一転、人間を嫌悪し世を憐む。アセズの都を棄てて森の洞窟に隠遁し、訪ねて来る者があれば、相手を問わず人間呪詛の悪口を浴びせ、やがて人里離れた海辺で死に絶える。

話しの筋は、このように極めて単純であるにもかかわらず、この作品は、構造上の問題として、前半と後半の脈絡の欠如が異口同音のように指摘されている。たとえば、ヴァン・ドレン Mark Van Doren は、「この劇は中間で無頓着に継ぎ合せた二つの劇である。いや、むしろ、二編の詩、白鳥の白色と烏の黒色で描かれた二幅の絵画である。コントラストがすべてである」ときびしく述べる。¹ ハリー・レヴィン Harry Levin も、前半と後半の断絶を語る。² 笹山隆氏も、「劇の前半と後半の脈絡が断たれて、作品全体として一つのまとまった意味を持つに至らなかったというのが、この劇の致命的欠陥と言わねばならない」と断じている。³ 主人公タイモンの、博愛家から人間嫌いへ、慈善から呪詛へ、人類愛から全面的人間否定へと約百八十度の転換は、作品の基本構造を形成しているが故に、この転換に説得力が無ければ、作品の「致命的欠陥」とされても致し方ない。冷笑家のアペマンタスが、タイモンに浴びせた非難「あなたは人間の両極端のみ知っていて、中間を知らない」「The middle of humanity thou never knewest, but the extremity of both ends.⁴」のように、この劇は「両極端のみ」の欠陥悲劇ということになる。

小論は、『アセズのタイモン』を真二つに分ける前半と後半は、必ずしも脈絡を欠くものではなく、両極端に分裂したタイモンの人間像も、実は、タイモンという一人の自己中心的人物の表裏の関係をなすものであって、タイモンの性格は基本的には変化していない、ということを目指したい。劇の前半における、人間の兄弟愛と相互扶助を信じ、博愛的・慈善的行為に

よって、アセンズの寵児となっている喜色満面のタイモンと、財産を蕩尽し、期待を裏切られて、世を拗ね、人を呪う後半のタイモンに一貫して見られるのは、自己中心性である。換言すれば、幸運の頂点にあるタイモンの周囲に群がって彼をほめそやす連中が、実は私利私欲の塊であるように、彼の慈善博愛も、その実体は、安易な自己満足であり盲目的自己陶醉でしかないということである。タイモンが、友人たちの阿諛追従を心からなる敬愛の情の表現であると思ひ込んだように、われわれも、彼の散財浪費を、philanthropy, generosity, munificenceと誤解してきたのではないだろうか。タイモンとともに錯覚を犯したきらいはなかったであろうか。

2

シェイクスピアの多くの作品同様、外観と内実の乖離は、『アセンズのタイモン』においても重要なテーマとなっている。開幕冒頭に登場する詩人と画家、宝石商と商人、そしてタイモンの膝下へご機嫌とりに伺候する元老院議員たちが、アセンズの都市社会を代表する。タイモンとアセンズの人々との関係は、「アセンズの文明社会の上に、威厳と友情と高貴さにしっかりと基礎をおいた完璧なヒューマニズムの理想像」の如くであるとアンリ・フルシェール Henri Fluchère は述べる。⁵ 主人公に、「アセンズ貴族の高邁な人間像」を見出すフルシェールは、言葉を続けて、タイモンの気前のよさを、「あたかも、彼がこの世に持つ財宝が、人々に対する彼の愛の衝動と同様に無尽蔵であるかのようなのである」と評し、彼らの交流を、「…手と手が差しのべられ、心と心が交され、盃がまわされる…地上楽園の魅惑的な幻想」であると解釈する。⁶ しかし、この光景は、あくまでも上辺だけの、「幻想」でしかない。友人たちの「差しのべられる」手の掌は物欲しさでむずむずしており、「まわされる」盃には只酒が溢れるに過ぎず、追従笑いを浮べた礼賛者たちに心があるとすれば、それは貪欲という心である。そのような心と「交され」るタイモンの心は、「愛の衝動」を秘め得るような宏い心ではなく、愛想よくされて悦に入る、人間的ではあるかも知れないが、とても「高邁」とはいえない、慢心である。

「知らぬが仏」というが、友人面をした寄生虫の如き連中の真実を知らないのは、己を神か仏のような大慈大悲の存在と錯覚しているタイモンのみである。

早々から舞台に充満するのは偽善の空気である。タイモンの肖像画を献呈する画家は、「時とともに世の中は悪くなる」「It wears, sir, as it grows.” (I.i. 3) ことを知悉している。顕彰の辭を草した詩人は、「報いを求め醜きを讃んば、いみじきをこそ歌うべき詩の栄光を汚すなり。」

When we for recompense have prais'd the vild,
It stains the glory in that happy verse
Which aptly sings the good. (15-17)

との認識を示す。しかし彼は、当の肖像画のタイモンの「目は聡明な光に輝き、唇には偉大な想像力が宿る！」

.... What a mental power

This eye shoots forth! How big imagination

Moves in this lip! (31-33)

と感嘆して見せる偽善的売文の徒である。彼らを魅するのはタイモンの知性の光でもなく想像力でもない。「慈悲深い人柄にまかせて恵む莫大な財産」“his large fortune, / Upon his good and gracious nature hanging” (56-57) にほかならない。彼らはそのような財産のお零れにありつこうと群がる「あらゆる種類の人間」“all minds” (53) の一部でしかない。しかも、彼らは、運命の女神に祝福されて好運の頂上にある者が、真逆さまに転落するこの世の有為転変する現実を、寓意的テーマとしても熟知しているのである。

この転落が語られるのをキューとするかのように、ラッパの吹奏とともに、訪問客一人一人に対して慰撫に挨拶しながら、タイモンが登場する。借金返済不能のかどで投獄された主人のために手紙一筆を乞う使者に対して、タイモンは借金全額の支払いと出獄後のアフター・ケアまで即座に約束する。財産のない召使いには、たとえ相愛の仲となっても娘はやれぬと言う一老人に対して、タイモンは二つ返事で、召使いに財産分けをすることを約束する。たしかに、タイモンのこのような援助は、善意に基づくものであり、バートランド・エヴァンズ Bertrand Evans が述べるように「親切な行為そのもの」とも理解できる。⁷ 苦境にある友人を助け、忠実な召使いの愛の成就に援助を惜しまないタイモンは、「人間同志の絆と義務」“bonds in men” (147) を信じて、喜んで私財を投ずる立派な人間であるともいえよう。しかし、われわれは、「あらゆる種類の人間」を引き付けるのが「莫大な財産」であり、「亡霊ども」“these spirits” (6) を呼び寄せるのが「恩恵という魔力」“magic of bounty” (6) であることも当分の「亡霊」どもから聞かされている。一筆依頼の使者を走らした友人も、娘の身を案じて来た老人も、タイモンの「恩恵という魔力」によって“conjure”された「亡霊」どもの仲間ではないとは決め難い。われわれは、タイモンの慈善的行為の直後に、詩人、画家、宝石商が順次、彼にとりいって懐を肥やすのを見せつけられる。その上に、犬儒のアベマンタスが繰り返し警告を発する。タイモンに群がるアセンズの人々は、彼を食いものにする悪党であると。「ペコペコする巧言令色の悪党ども、敬愛の念露程もないくせに！」“That there should be small love amongst these sweet knaves, / And all this courtesyl!” (248-49)。第一場をしめくくる貴族の台詞「タイモンがいつまでも好運でしあわせであられますように」“Long may he live in fortunes.” (281) は、「いつまでもあると思うなタイモンの富」ともとることが可能で、アイロニカルな予言ともなる。

第二場の大宴会は、タイモンの気前のよさをドラマタイズした、和気藹々たる友情の集いかのように見える。ご馳走を囲んで、美酒をくみ交わし、和やかに談笑する情景は、まさに「人間同志の絆」の証の如くである。しかし、これはあくまでも表面だけのことである。アベマンタスは、苦々しく、しかし仮借なく、真相をあばく。「寄ってたかってタイモンを食いものにする。しかもご本人は気がつかない！ 大勢の連中がたった一人の血に肉をひたして食うのを見るのはたまらない。」

.... What a number of men eats Timon, and he sees 'em not!
It grieves me to see so many dip their meat in one man's blood.
(I. ii. 39-41)

犬儒の冷やかな観察は続く。「例はいくらでもある。あの人の隣に坐って、いまパンを分け、一つ杯で酒を飲みあい、乾杯などと言っているやつが、まっさきにあの人を殺しかねないやつだ。」

... the fellow that sits next him, now parts bread with him,
pledges the breath of him in a divided draught, is the readiest
man to kill him. 'T'as been proved. (46-49)

『アセンズのタイモン』に心酔し、この作品は、『ハムレット』『トロイラスとクレシダ』『オセロ』『リア王』を含みそして超越するものであると信じているナイト G. Wilson Knight は、ここにキリストとユダの類似を見出し、「生きとし生けるものすべてを愛する者」としてのタイモン像を説く。⁸ しかし、アペマンタスは、友人面をして富豪にとり入る徒輩の裏切りを、ユダとのアナロジーで語っているのであって、追従者たちの隠れた内実に盲目であるタイモンを美化し、キリストになぞらえているのではない。

知恵の欠如も美德であるかの如くにタイモンを理想化するナイトは極端である。⁹ しかし、この作品を論ずる大多数の批評家は、前半の主人公を、少なくとも基本的には、善良であり、高貴であると見る。ウィラード・ファーンナム Willard Farnham は、「タイモンの悲劇は、人間に対する圧倒的愛情をいただく者が、自分は愛されていないということが分るとき、その愛情を圧倒的憎悪に変える悲劇である」とし、¹⁰ ノースロップ・フライ Northrop Frye は「彼(タイモン)が“高貴”だと言われるのは正当であると人は感ずる」と述べ、¹¹ また、ロルフ・スェルナー Rolf Soellner は、「たとえ愚かであっても、彼は立派な動機から与えるのである」と評する。¹²

「貧乏で着るものもない惨めな人々」“Poor naked wretches”¹³ に思いを馳せ、弱きを助けるのは人情であり、慈善である。友人たちと酒をくみ交すのも、交情を密にし、またその表現ともなる。しかし、タイモンの施す恩恵、気前のよさは、真の人情、慈善、心の交わりを示唆するものであろうか。ヴェンティディ阿斯を自由の身にしてやる情深い行為も、また、召使いがその愛する女性と結婚できるように財産を分け与えてやる慈父のような行為も、立派な慈善行為である。しかし、タイモンの慈善行為の動機が、果して慈善にあるのか、安易な自己満足にあるのか疑問無しとしない。表面的に立派な行為であっても、その行為の意味を考えるにあたり、タイモンが、道徳的に退廃したアセンズの人々に食いものにされている状況も忘れてはならない。牢獄から解放され、その上に十分な遺産も相続したヴェンティディ阿斯が、用立ててもらった金の返済を申し出ると、タイモンはそのような返金を受け取るのは「落度」“faults” (13) であるとして拒み、「真の友情」“true friendship” (18) を謳歌する。このような場合、返金を受け取りその金の活用を図るのが、むしろ「真の友情」にふさわしく、また慈善家にとって自然であると考えるのは、資本主義経済の毒に犯された現代人の歪な反応であらう。

うか。ヴェンティディ阿斯が返済不可能な程の大金を借りて投獄された事情も明らかにはされていないが、タイモンが破産の憂目に会ったとき、この男が恩人救援にかけつける様子も全くない。タイモンの召使いに対する財産分けの恩顧とて、アセンズの欲張り爺にしてやられた面は果してないであろうか。このようなタイモンを理想化し、あくまで高貴であるとする批評家の多くは、彼が判断力を欠き、「浅薄」であることは認める。¹⁴ たしかに、破産の危機に直面してタイモンは語る。「自分は下心をもって恵んだことはない。賢明ではなかったにせよ、恥ずべきではない。」

No villainous bounty yet hath pass'd my heart ;

Unwisely, not ignobly, have I given. (II. ii. 177-78)

この「恥ずべきではない」という認識にオリヴァーも同意している。タイモンに対して一層批判的なデヴィッド・クック David Cook も、“well-meaning fool” であるとして、彼の「善意」に対してまで疑いの目を向けてはいない。¹⁵ しかし、タイモンの気前のよさは、“not ignoble” と断言できる純粋なものであろうか。彼の行為は、判断に欠けるきらいがあるだけで、高貴だといえる種類のものであろうか。

タイモンは、見境なく金品を与える。先にとりあげたヴェンティディ阿斯と召使いに対する援助は、タイモンの気前よい行為の中でもっとも賞賛されるべき二例であるが、これはむしろ例外的である。われわれは、開幕冒頭において、詩人、画家、宝石商が、タイモンを食いものにする寄生虫のような人間である事実を見ている。しかも、彼らは例外的な悪党ではなくて、アセンズの典型的な人々とされているのである。貴族や議員たちも皆同じ穴の貉である。彼らはタイモンに対して、敬意も好意も抱いているわけではない。無尽蔵に見えたその財宝を食いつぶしても、タイモンに対して覚えるのは同情の念ではなく、侮蔑である。

相変らず狂気の散財だ。あれでは続くはずはない、続きはしない。もし金が欲しくなったら、盲乞食の犬を盗んでタイモンにやればよい。するとその犬がたちまち金になる。……あの邸の門番はにこにこしていて、道を通るだれでもいつでも家に招き入れている。あれでは続くはずがない。理性のある者なら彼の身代が安全だとはとても思えない。

.... Still in motion

Of raging waste? It cannot hold, it will not.

If I want gold, steal but a beggar's dog

And give it Timon—why, the dog coins gold ;

.....

.... No porter at his gate,

But rather one that smiles and still invites

All that pass by. It cannot hold ; no reason

Can sound his state in safety. (II. i. 3-13)

偽善の空気についてはすでに述べたが、彼らは徹底した偽善家でもある。

われわれの敬愛の情の一端でもお見せできるような、何かお役に立てる
光栄を与えて下さいますならば、これにまさる幸福はございません。

Might we but have that happiness, my lord, that you would
once use our hearts, whereby we might express some part of our
zeals, we should think ourselves for ever perfect. (I. ii. 82-85)

このような偽善的阿諛追従に対して、タイモンは有頂天になり、涙を流して喜ぶ。感傷の涙で
ある。

そうです。私は貧乏であればと何度願ったことか。もっと皆様と近すぎ
親しくなりたいばかりにです。われわれは親切な行いをするためにこの
世に生まれてきたのです。友人の財宝こそ、お互いに自分のものと呼ぶ
のに最もふさわしく適当なものです。大ぜいの人々が兄弟のように、お
互いの財宝を使い合えるということは、なんと貴い喜びでしょう。ああ、
喜びは生まれたばかりなのに消されそうです。この目は涙をおさえられ
そうもありません。恥しい涙を忘れるために、皆様のために乾杯をしま
しょう。

Why, I have often wish'd myself poorer that I might come nearer
to you. We are born to do benefits; and what better or properer
can we call our own than the riches of our friends? O what a
precious comfort 'tis to have so many like brothers commanding
one another's fortunes. O joy's e'en made away ere't can be born!
Mine eyes cannot hold out water, methinks. To forget their
faults, I drink to you. (98-105)

貪欲・忘恩の徒に食いものにされていて、一人悦に入り、センチメンタルな涙にひたるタイモ
ンに、シェイクスピアが高邁なる博愛家の姿を表現しているとはとても思えない。博愛主義者
のパロディーならわかる。高貴、高邁だと追従者たちが捧げる賛辞は、結局のところ、拝金主
義に墮した腐敗した社会において、金で買われた賛辞にすぎないのではないか。目が醒めたタ
イモン自身、黄金を発見してつぶやくではないか。

黄金か？ 黄色いきらきら輝く貴重な金ではないか？……これだけの金
があれば、黒を白に、醜を美に、邪を正に、賤を貴に、老を若に、怯を
勇に変えることもできよう。

"Gold? Yellow, glittering, precious gold?"

.....

....Thus much of this will make

Black, white; foul, fair; wrong, right;

Base, noble; old, young; coward, valiant. (IV. iii. 26-30)

ジョンソン博士 Samuel Johnson も鋭い観察を残している——「破局は、散財をして益にな

らず、友情ではなく追従を買うこれみよがしの施しに対して強烈な警告となる。』¹⁶

タイモンの博愛・慈善の下に潜んでいるのは自己中心性である。財宝をばらまいて、アセンズの社会の寵児となり、有頂天になって、感傷の涙で目がくもるから、追従者たちの真相が見抜けないのである。タイモンにとって、判断力の欠如は、瑕瑾ではなく、むしろ、彼が自己中心に毒されている事実を示す一つの証拠となり得るものである。自己中心に陥って、状況判断に重大な誤りを犯す者の中にブルータスの例がある。

スエルナーは、タイモンは、「高貴さと、エゴティズムと愚かさが複雑に混合した人物」であると評する。¹⁷ しかし、タイモンの「高貴さ」はエゴティズムの一表現でしかなく、また、愚かさは、自己中心的人物の一属性なのである。

3

「タイモンの気前のよさは、愛よりも情欲に似ている」と指摘したのはジョン・ウェイン John Wain である。¹⁸ ナイトも「タイモンの魂の真に “erotic” な豊かさ」を語る。¹⁹ ナイトの用いる “erotic” の語の意味は判然としないが、あえて言うなれば、タイモンの魂に宿る “erotic” な情念は、魂を豊かにするようなものではない。それは、他人によって高く評価され、賞賛されたいという本能的・衝動的欲望と関わるもので、魂を奴隷化し貧困化させる種類のものであろう。

『アセンズのタイモン』はまともな女性が一人も登場しない特異な作品であるが、情欲や官能、淫売がしばしば語られる。姿を見せる女性は、仮面劇に出るアマゾンとすれば、アルシパイアディーズの情婦となっている二人のいかがわしい女だけである。売春はタイモンも罵倒するけれども、実は、彼の自己中心性とも関連するのではないと思われる。ウィニフレッド・ノウォットニー Winifred Nowottny は、タイモンの想像において、売春婦は、「秩序ある社会の仮面下に潜む真の卑しさを象徴するものであると同時に、また、具体的に、象徴的にも（社会の）真実に対して破壊力を及ぼす活動の主体者」であるととらえる。²⁰ この解釈にしたがえば、売春婦はタイモンとパラレルな関係にあることになる。その一人が、名前も Timandra として、主人公の名前と類似するのも偶然ではないことになる。

タイモンを特徴づけるのは、気前のよさという外観に隠れた自己中心性である。博愛家・慈善家という空疎な賞賛に我を忘れ耽溺する一種の卑しさである。

森の洞窟に隠遁したタイモンについて執事のフレイヴァスが述べる次の評は、そのまま劇の前半における喜色満面の主人についても正鵠を得る批判となる——「主人はただご自分のことしか頭にない」「…he is set so only to himself」(V. i. 116)。運命の女神が微笑む前半においても、親しくしてくれ、称揚を惜しまないからこそ、周囲の人々は存在価値があるのであり、タイモンの意識の中心は、あくまで「自分」なのである。『アセンズのタイモン』をジョンソン流の tragical satire とするキャンベル Oscar James Campbell の説に、にわかには賛同できない。しかし、タイモンに、「心の広さではなく、自らの気前のよさを見せびらかして自己満足」を見出すキャンベルの視力は正常であるといえよう。²¹

ところで、アリストテレスが、『ニコマコス倫理学』において、「もの惜しみしない心の宏さ」について述べる文章は、タイモンの人間像についても有益な示唆を与える。

もの惜しみしないひとがひとに与えるのは美しさのためであり、その与え方はただしい仕方にしたがう。すなわち、かれは与えるべきひとびとに対して、与えるべきだけのものを、与えるべき時に与え、その他、ただしい与え方に、本来、付随するかぎりのすべての規定にしたがって与える。……かれはまた、自分の所有物を粗末にすることもない。それは、かれがそれを用いて誰かの役に立ちたいと願っているからである。また、かれは誰れかれの区別なしに与えることもない。それは、かれが与えるべきひとびとに、与えるべき時に、またそうするのが美しいことである場合に与えうるものを持つためである。……もの惜しみしない心の宏さは与えられるものの量のうちにあるのではなく、与えるひとの心の持ち方にあるからであり、そのような心を持つひとはその財産に応じて与えるのである。……その財産に応じて、支出すべきもののために支出するひとがもの惜しみしないひとである。この点で度を越えるひとはしまりのないひとである。……かれら「しまりのない人の多く」の供与は、往々にして、貧困の状態にあるべきひとを富裕なひとにすることがあるし、またその人柄において適正なものをもっているひとに対しては何ひとつ与えないのに、胡麻すりやその他何らかの快さをかれらにもたらすひとに対しては多くを与えることがある。このゆえに、かれらのうちの多くはふしだらなひとでもある。なぜなら、かれらは気安く出費することにより、ふしだらな行為のためにも浪費するひとだからであり、美しさを目ざして生きることがないため、快樂へと傾くからである。²²

長い引用になってしまったが、タイモンの行う金品供与の意味、特に、「与えるひとの心の持ち方」を重視するにあたり、大いに参考にしてしかるべき哲人の文章である。アリストテレスは、「与えて、受けない点で度を越えるのは邪悪なひとや品性の卑しいひとの徴ではなく、愚鈍なひとの徴だからである」とも述べている。²³しかし、タイモンの場合、「快樂へ傾く」だけでなく、ちやほやされて財宝を蕩尽し破滅へと転落したのは、彼が「愚鈍」であるのみならず自己に溺れたからでもある。だからこそ、お為ごかしに騙されたと悟ったとき、タイモンは、掌を返すように、冷淡をきわめる友人たちのみならず、人間すべて、天地宇宙をも否定し、呪うようになるのである。

多くの批評家が述べるように、タイモンの「豹変」は、内省や熟考を経ることなく、唐突になされる。²⁴「心理的危機」を伴わない。²⁵「もの惜しみしない心の宏」い人間が厭世的になるのではない。もともと「しまりのないひと」が、自己満足に現を抜かして財産と友人を喪失し——「そのような贅辭を買う金がなくなると、そのようにほめそやす声もなくなってしまうのです」“The breath is gone where this praise is made” (II. ii. 174)——万物破壊をわめく

ようになるのである。タイモンの呪詛は、「自分のことしか頭にない」人間の短絡した非難であり八つ当りである。それは、前半に見られる「道徳的弱点の論理的帰結」である。²⁶ タイモンの絶体的憎悪は、絶体的愛情から大転換したのではなく、絶体的愛情と見えたにすぎない自己中心性の裏返しなのである。

4

ハムレットはホレイションに言う。「君はあらゆる艱難をなめていながら、すこしもそれを顔にださず、運命の女神になぐられようが、ひいきにされようが、ひとしく平然として受け容れる。」

...thou hast been

As one in suff'ring all that suffers nothing,

A man that Fortune's buffets and rewards

Hast ta'en with equal thanks; ²⁷

理想化されたスティックなホレイション像と対蹠的な人物がタイモンである。「運命の女神にひいきにされる」と有頂天になり、「なぐられる」と万物破壊を叫ぶ。

タイモンの魂胆も知らずに、かつての大盤振舞いの復活だと信じこんで集る「口先だけの友人ども」「knot of mouth-friends」(III. iv. 85) に対して、ぬるま湯とともに投げ浴びせるタイモンの罵倒は、失望と怒りの爆発である。

嫌われて長生きしたらいい

にやにや笑いの、ごますりの、憎むべき寄生虫ども

慰撫な人殺し、愛想のいい狼、おとなしい熊

.....

家なんか燃えろ！ アセンズよ沈没しろ！ これからは

人間が、人類全体が、タイモンの憎悪の的だ！

Live loath'd, and long,

Most smiling, smooth, detested parasites,

Courteous destroyers, affable wolves, meek bears,

.....

Burn, house ! Sink, Athens ! Henceforth hated be

Of Timon, man and all humanity! (III. iv. 89-101)

しかし、タイモンの憤怒と憎悪は、爆発させることによって一過するのではなく、また、新たな現実認識をもたらし、人格に深みや豊かさを与えるものでもない。憎悪の念は、「口先だけの友人ども」に限定されるのではなく、あらゆる階級、職業に及び、老若男女を問わず、ついに全人類に及ぶ。

妻たちよ、不貞になれ！

子供たちよ、親不孝になれ！ 奴隷たち阿呆たちよ、

いかめしいしわだらけの元老どもを席から引きずりおろし、
かわりにお前らが職務を執れ！
うら若き処女たちよ、直ちに売女になれ！
両親の目の前でやれ！ 破産した人たちよ、しっかりしろ、
借金を返すよりは、ナイフを抜いて、
債権者どもののだ笛をかき切ってしまえ！ 年季奉公人たちよ、
盗め！ お前らのまじめくさった主人たちは天下御免の大泥棒だ。
女中よ、主人のベットへもぐりこめ。
お前の家の奥さんは女郎屋のおかみだ。16歳の息子よ、
よぼよぼのおやじから杖を引ったくり、
その頭をたたきつぶせ！ 敬虔も罪のおそれも、
神信心も、平和も、正義も、真実も、
親への敬意も、夜の休息も、隣人愛も、
教訓も、礼儀作法も、職業も、商売も、
位階も、服従も、習慣も、法律も、
何もかもめっちゃくちゃにするような逆のものになってしまえ！
ただ混乱だけがいつまでも続け！

.....

神々よ………タイモンの憎しみが、
上下の別なく全人類への憎しみへと日とともに増大していくよう祈ります。
アーメン。

Matrons, turn incontinent!

Obedience fail in children! Slaves and fools,
Pluck the grave wrinkled senate from the bench,
And minister in their steads! To general filths
Convert, o' th' instant, green virginity!
Do't in your parents' eyes! Bankrupts, hold fast;
Rather than render back, out with your knives,
And cut your trusters' throats! Bound servants, steal!
Large-handed robbers your grave masters are,
And pill by law. Maid, to thy master's bed;
Thy mistress is o' th' brothel! Son of sixteen,
Pluck the lin'd crutch from thy old limping sire;
With it beat out his brains! Piety and fear,
Religion to the gods, peace, justice, truth,
Domestic awe, night-rest and neighbourhood,

Instruction, manners, mysteries and trades,
Degrees, observances, customs and laws,
Decline to your confounding contraries;
And yet confusion live!

.....

And grant, as Timon grows, his hate may grow
To the whole race of mankind, high and low!
Amen. (3-21 ; 39-41)

呪いの対象が広く全人類にまで拡大されるのみならず、タイモンが否定するのは、リチャード・フッカー Richard Hooker が、『教会行政法論』*Of the Laws of Ecclesiastical Polity* において説いたエリザベス朝の偉大な倫理大系であり道徳律である秩序そのものに及ぶ。『トロイラスとクレシダ』においてユリシーズが説く、あの万物の存在を可能ならしめ、存在に意義を与える秩序の全面否定である。

タイモンは、黄金を発見すれば、その破壊力をもって世を呪い (IV. iii. 26-45)、娼婦に会えば、「ばら色の頬をした若者」“rose-cheek'd youth” (87) をも心身ともに汚せと言いつけ、武将アルシバイアディーズには、軍隊をもってアセンズを壊滅させよ、殺戮を欲しいままにし、自分も減んでしまえと言いつつ (105-130)。盗賊に対しては、日月地海はじめ森羅万象が盗賊であり、悪事の限りを尽せと金をやる。執事が忠実である事実を不承不承ながら認めざるを得なくなるとき、タイモンの人間嫌いが、その対象の実情とは全く無関係で、恣意的、観念的、感情的であることが一層明らかになる。

自分は人間をすべて憎みたかった。

お前はその憎しみからのがれたんだ。しかし、ほかのやつらはみんな
呪い殺してやるんだ。

How fain would I have hated all mankind,
And thou redeem'st thyself. But all, save thee,
I fell with curses. (503-5)

彼は一人の例外もなくあらゆる人間を敵とし呪いたいのである。唯一の例外となる執事に金を分け与えるが、そのとき付け加えるのが次の条件である。

帰って、裕福に楽しく暮らせ、

ただし、一つ条件がある。人間どもから離れて住め。

すべての人間を憎み、呪え、誰にも慈悲をかけるな。

乞食を助けたりせず、そいつの飢えた肉が骨から剥げ落ちるにまかせておけ。犬にはくれてやるものでも、人間にはやるな。

Go, live rich and happy,
But thus condition'd: thou shalt build from men;
Hate all, curse all, show charity to none,

But let the famish'd flesh slide from the bone
Ere thou relieve the beggar; give to dogs
What thou deniest to men. (529-34)

この徹底的否定、呪詛の言葉を吐く人間が、果して、友情を求め、善意に徹し、博愛のため我をも忘れた人間であり得ようか。むしろ、多くの人々を意のままに動かし、「彼の耳に生け贅を捧げるような口吻で追従をつぎこまれ」“Rain sacrificial whisperings in his ear” (I. i. 83), 得意満面となった者が、彼の人生の快よきすべてを一挙に喪失して、怒り狂っている姿ではなかろうか。順境の感涙も、逆境の呪詛も、ともに同一人物の表であり裏であるが、表裏を一体とするのが、彼の自己中心性である。

5

コールリッジ T. S. Coleridge が、『アセンズのタイモン』を『リア王』の「余韻」“an after vibration” であるとし、²⁸ ドーヴァー・ウィルソン John Dover Wilson が、「死産の双生児」“the still-born twin” と評したのはよく知られている。²⁹ たしかにこの二作には類似点が多いが、しかし、タイモンは所詮リアではない。

タイモンもリアも、信頼する親近の忘恩裏切りによって、幸福な状態から転落する。両者ともに、激怒し、憎悪し、呪詛する。その対象も、直接背信を行った人々から、人間そのものに拡大され、世界の壊滅が絶叫される。しかし、リアが国王であり、また裏切った者が、血肉を分け、また王国を分割世襲した娘たちであり、その婿たちであり臣下であるに対して、タイモンは富豪とはいえ、敬愛の情はともかく、絶体的忠誠を要求できる地位にある人間でもなく、彼を見捨てるのは社会的に関係する人々にすぎない。タイモンには、親兄弟や妻子は、その存在さえ示唆されない。同じ背信とはいえ、倫理的意義においても、したがってそれから被る精神的打撃も、大きな相異があるのはいうまでもない。

「罪を犯す以上に犯された」“More sinn'd against than sinning”³⁰ リアの苦悩、人間に対する全面的否定には説得力がある。信じ難い程の愚行を犯したとはいえ、この老いた父親であり国王であるリアに対して、われわれは同情を禁じ得ない。また、不孝不忠な姉娘たちやその仲間が悪を見出し、本能的ともいえる強い反発を覚える。その上、正気と狂気の狭間をさまようリアには、精神的覚醒が訪れる。苦しみがリアをヒューマナイズする。リアには苦難に耐えて、成長し成熟する偉大さがある。³¹

タイモンが失うものは世俗的繁栄であり、彼の受ける打撃は、物質的・社会的次限のものである。全人類の滅亡を叫びしめる程の悪の問題は存在しない。また、リアと異なり、タイモンは苦しみを通して何も学ばない。リアもタイモンも同様に、「附けたものを剥ぎとった人間」“unaccommodated man”³² となるのであるが、ブリテンの老王が、ヘロイックな背丈の人間へと成長するのに対し、アセンズの長者は、自己憐憫の駄々を大仰にこねるだけである。

タイモンは、そのギリシャ語名が示唆する通り (timé—honour, value, worth or reward),³³ 自己の名誉、自己の重要性、自己の価値に因われ溺れた人間である。彼の博愛慈善も、また人

間呪詛も、自己愛、自己中心性の異なる表現でしかないのである。

註

1. Mark Van Doren, *Shakespeare* (1939, rpt. Garden City, N. Y., 1953), p. 249.
2. Harry Levin, *Shakespeare and the Revolution of the Times* (New York: Oxford University Press, 1976), p. 204. また, "His [Shakespeare's] philanthropist is one man, his misanthropist another, and the transition between them is a sudden recoil rather than a gradual disillusionment." p. 201.
3. 笹山隆「『アセズのタイモン』」小津次郎編『シェイクスピア・ハンドブック』(南雲堂, 1969), p. 467. また, 和田勇一「『アセズのタイモン』」『英語青年』110(1964), 342 参照.
4. *Timon of Athens*, ed. H. J. Oliver (London: Methuen, 1969), IV. iii. 301-2. 以下, 『アセズのタイモン』からの引用はすべてこの New Arden 版により, 本文で示す.
5. アンリ・フリュシェール『シェイクスピア——エリザベス朝の劇作家』(1948), 笹山隆訳(研究社, 1969), p. 369.
6. フリュシェール, p. 369.
7. Bertrand Evans, *Shakespeare's Tragic Practice* (Oxford: Clarendon Press, 1979), p. 286.
8. G. Wilson Knight, *The Wheel of Fire* (1930, rpt. New York: Meridian Books, 1957), p. 235. また, Northrop Frye, *Fools of Time* (1967, rpt. Toronto: University of Toronto Press, 1973), pp. 110-11.
9. Knight, p. 218.
10. Willard Farnham, *Shakespeare's Tragic Frontier* (1950, rpt. Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1963), p. 44.
11. Frye, p. 111.
12. Rolf Soellner, *Timon of Athens* (Columbus: Ohio State University Press, 1979), p. 125.
13. *King Lear*, ed. Kenneth Muir (London: Methuen, 1971), III. iv. 28.
14. たとえば Oliver, p. xlv; Levin, p. 203. ナイトにとっては, タイモンの判断力の欠如はむしろ美徳である。Knight, p. 212.
15. David Cook, "Timon of Athens," *Shakespeare Survey*, 16 (1963), 83.
16. *Dr Johnson on Shakespeare*, ed. W. K. Wimsatt (Harmondsworth, Middlesex: Penguin Books, 1969), p. 128.
17. Soellner, p. 67.
18. John Wain, *The Living World of Shakespeare* (Harmondsworth, Middlesex: Penguin Books, 1966), p. 217.
19. Knight, p. 210.
20. Winifred M. T. Nowotny, "Acts IV and V of *Timon of Athens*," *Shakespeare Quarterly*, 10 (1959), 495.
21. Oscar James Campbell, *Shakespeare's Satire* (1943, rpt. New York: Gordian Press, 1971), p. 186.
22. 『アリストテレス全集』13, 加藤信朗訳(岩波書店, 1973), 108-13. ブローは, タイモンは, 「もの惜しみしない心の広い」人に相当すると見る。Geoffrey Bullough ed. *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare* 6 (London: Routledge and Kegan Paul, 1977), 248.
23. アリストテレス, 112.
24. Levin, p. 204.
25. フリュシェール, p. 375.

26. Andor Gomme, "*Timon of Athens*," *Essays in Criticism*, 9 (1959), 117.
27. *Hamlet, Prince of Denmark*, ed. Frank Kermode in *The Riverside Shakespeare*, eds. G. Blakemore Evans et. al. (Boston: Houghton Mifflin Company, 1974), III. ii. 66-68.
28. *Coleridge's Shakespearean Criticism*, ed. T. M. Raysor (London: Dent, 1960), 1, 211.
29. J. Dover Wilson, *The Essential Shakespeare* (1932, rpt. Cambridge: Cambridge University Press, 1960), p. 131.
30. *King Lear*, III. ii. 59.
31. 拙論「*King Lear* における "Kindness"」『神戸女学院大学論集』24: 3(1978年3月)参照。
32. *King Lear*, III. iv. 109.
33. Murray J. Levith, *What's in Shakespeare's Names* (Hamden, Conn.: Archon Books, 1978), p. 65.

なお、*Timon of Athens* からの引用箇所の訳については八木毅氏と小田島雄志氏の翻訳に負うところが多い。

原稿受理 1983年4月22日